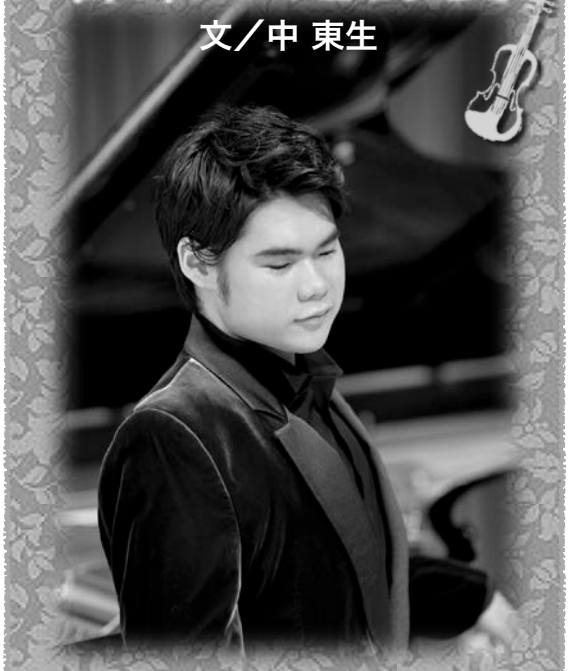
音楽の処方箋

文／中 東生



第11回　スイス人を泣かせた日本人

スイス人は涙もろい民族であろうか？イエスと答える人は少ないだろう。それは雇われ兵として戦争に行くことを生業としていた頃の遺伝子なのか、日本人と同じく感情をストレートに表現することに慣れていないからなのか・・・。そんなスイス人を涙ぐませた日本人がいる。

幼い頃から数々のコンクールを制覇していた辻井伸行の名前が日本中に知れ渡ったのは、やはり2009年のヴァン・クライバーンコンクールで優勝したのがきっかけだろう。生まれながらにして盲目でありながら、鍵盤の上を自由自在に舞い続ける彼の指に、釘付けにならずにはいられない。そしてその上に、彼の音楽は天使の声のように、普段は眠っている感覚を呼び覚ます。

コンクール優勝を受けて世界中から辻井伸行にオファーが殺到したが、その中にはバーゼルのエージェントも含まれていた。2010年に辻井氏が出演したバーゼルでの「ライジング・スター」コンサートでは異例の満員御礼となったため、聴衆の希望により、２回目のコンサートを2012年の母の日に即企画せざるを得なかったほど、多くの人の心を掴んだという。そして３回目のスイス公演を控えている辻井氏にインタヴューを申し込んだ。

バーゼル交響楽団とスイスの聴衆にはどのような印象をお持ちですか？

バーゼルで初めて演奏したのは2010年12月でした。本当はコンサート前日に来るはずでしたが、その前の公演地だったベルリンの空港が寒波と積雪で閉鎖になってしまい、一日遅れてコンサート当日の午後にバーゼルへ着きました。ホールの近くの教会を囲むようにクリスマスマーケットができていたのを覚えています。『展覧会の絵』等を演奏して、翌日にはモスクワに向かいましたので、最初のバーゼル滞在は慌ただしく、正直なところ、あまり多くの記憶はありません。それでも主催者の方が気に入って下さって、2012年５月にバーゼル交響楽団との再共演の機会を頂きました。

その時の曲目はプロコフィエフのピアノ協奏曲第３番でしたが、この曲を演奏会で弾くのは初めてでした。指揮者はクラリネットの演奏家としても名高いマイケル・コリンズさんでしたが、「この曲はオケの一員として何度も吹いたことがあるけれど、指揮するのは初めてなんだ。一緒にがんばろう！」と言って下さったのが印象的でした。コリンズさんはとても陽気で元気な方でした。この協奏曲はピアノパートも難しいですが、オーケストラにとっても難曲だと思います。それでも指揮者とオーケストラのサポートのおかげで大成功を収めることが出来ました。バーゼル交響楽団には日本人の団員が３人もいらっしゃるのも、心強い気がします。そしてまた、東日本大震災で楽器を流されてしまった被災地の学校のために、スイスのオーケストラの方々がチャリティーコンサートなどで募金を集めて楽器をプレゼントされた、ということをコンサートの主催者からうかがいました。そうしたことへのお礼の気持ちも込めて、アンコールには被災地を思って自作した「それでも、生きてゆく」を演奏しました。

今回のプログラムにあるラフマニノフのピアノ協奏曲第２番は、辻井さんにとって特別な存在だと思いますが、出会いや思い入れをお話下さい。

子供の時からロシアの音楽には憧れがあって、ラフマニノフの第２番もいつか弾きたいと思っていました。初めてコンサートで演奏したのは2007年７月の読売日本交響楽団との演奏会です（指揮はパオロ・カリニャーニさん）。そのあと2008年５月には佐渡裕さん指揮のベルリン・ドイツ交響楽団とベルリンでCD録音をして、2009年６月にはクライバーン・コンクールのファイナルでも演奏しました。その後も世界各地で演奏しています。ロマンティックでスケールが大きくて、雄大で、素晴らしい作品だと思います。

「辻井さんの音楽を聴くと絵画が思い浮かぶ」という批評をよく見かけますが、ご自身はどのようなイメージで音楽を捉えるのですか？

作曲家がどのようなことを考えてこのように書いたのか、どんな気持ちを込めたのか、といったことを常に考えながら演奏するようにしています。

ご家族の存在は、辻井さんの芸術にどのような影響を与えていますか？

両親は音楽のことをほとんど知りませんでしたが、８か月の時に母がショパンのCDをかけてくれたおかげで、自分が音楽好きなことがわかりました。２歳の時におもちゃのピアノを買ってもらい、一日中弾いていたそうです。

両親は僕をプロの演奏家にするつもりはなくて、「楽しみになれば」という気持ちでピアノを弾かせていたそうです。「練習しなさい」と言われたことはなくて、好きな時に好きなものを好きなように弾かせてくれたのが結果的に良かったのではないかと思います。

ピアノ以外のことでは、母はハンディキャップのない子供と同じように扱ってくれて、絵の展覧会や花火大会鑑賞にも連れて行ってくれました。そして母なりに一生懸命説明してくれたので、そうしたものを楽しむことができるようになりました。「色彩感がある」と言われるのは、母のお陰かもしれません。

前回のバーゼルでのコンサートでは、多くの聴衆が辻井さんの音楽に涙したといいます。もし、そのような状況に居合わせたら、どのようなお言葉をおかけになりたいですか？

音楽に感動されたのであれば、余韻に浸っていただくためにも、言葉はおかけしない方がいいと思います。

自作の曲『それでも、生きてゆく』にEXILEのATSUSHIが歌詞を書いたシングルもあり、「クラッシックに興味のない方にもコンサートに来ていただけるような魅力のあるピアニスト」が彼のゴールだという。困難を乗り越える勇気が欲しい方、心を浄化して元気を充電したい方は、是非以下の処方箋をお試し下さい。

４月30日（水）辻井伸行ピアノ演奏会
ベルン　メニュインフォーラム　Menuhin Forum Bern
５月７日（水）、８日（木）バーゼル交響楽団演奏会
バーゼル州立音楽堂　Stadtcasino Basel
指揮／カスパール・ツェーンダー
ピアノ／辻井伸行
プログラム／ラフマニノフ作曲ピアノ協奏曲第２番
ドボルジャーク作曲交響曲第５番